

「はじめて」のはじまり

三井マリ子

そもそものはじまりは何だったんだろう？

あの日の電話だったんだろうか。

「ねエミツイさん、この間話した件だけど、真剣に考えてくれる。もう時間がないのよ」

こんな電話が職員室にかかってきたのは一九八七年二月の中旬。高校の英語科職員室は、学年末試験、大受験を控え、あわただしさもピークに達している頃だった。

「エエ、エエ」(電話口で)

「ねえ先生、また後でこようか。長くかかるんで

しょ」(私の横で)

「ハイ、わかりました。ここ職員室なもんですから。また後でこちらからご連絡しますので」(電話口で)

分詞構文から接続詞に転換する時の方法がサッパリわからないと私を待っていた生徒たちは、受話器を置いた私にホッとして、さっきの質問を続けた。

部屋の向こうでは

「君イ、これじゃダメだよ。そんな甘いもんじゃないよ」



と声を荒げて叱っている教員と、

「ハイ、がんばります」

と紋切り型の応答をする生徒。

二月の職員室は、毎年のこととはいえピリピリしたふんいきと、もうすぐ新しい門出を迎える晴れがましさの入り混じった独得のムードに包まれている。真新しさでいっぱいになる四月とは違う、何か次に新しいことを待ちうけているような季節。それが二月の学校である。

私は、そんな季節の学校に飛びこんだ電話の二週間後、この学校——都立駒場高校——を退職した。この高校の生徒たちを最後の教え子にして、十三年間の英語教員のキャリアにピリオドを打ったのである。

実は、自分の住んでいる地区の都議会議員（どんな人が出ているかも知らなかった）が、突然亡くなったので補欠選挙がある。土井委員長をはじめ社会党は女性の議員を出したがっている。口を開けば男女ビョー

ドーを言ってきた三井さん、出てくれないか。

こんなお話に、はっきり「ノー！」と言わなかった私は、どんな具体的にせまってくるおさそいに驚きながらも、「やってみてもいいかな……」と思いはじめ、友人たちに相談をもちかけた。

退職するまでの二週間、私のもとにはあちこちからさまざまなお知らせが届いた。

「補欠選挙？ 一人でしょ、勝つのは、無理よ。」

「もう七人も出馬している？ 当選の見込みがあれば社会党から男性が出てくるわよ。でも、やってみたら」

「いくら土井さんが委員長でも社会党はオジサンの党よ。組合中心なのよ。男社会にとりこまれるだけよ」

「投票まで一ヶ月ちょっと。惨敗したらみじめだな」

「からだかそんなに丈夫じゃないのに。選挙ってそれはそれは大変。駅前で寒空の中、立ってあいさつなんかするんですよ。あなたには苛酷すぎる」

「男性区議に出馬意志のある人がいるらしい。区議

をさしおいて地元を根をおろしていない女性が突然出てもハレーションを起こすだけ。絶対ハンタイ」

「ブツブツ悩んでないでやってみたら。応援するわヨ。マリ子さんのやってきた事を政治の場に広げる時なのよ」

「こんな風に分に出番がきたのに断わっていたら人に出ろなんて言えないわよ。今、女が挑むことが大事」

毎晩のようにいろんなところからいろんな立場の人がいろんな意見を寄せてきた。ある晩やっと決心したかと思ったら、翌朝やっぱりやめとこうと考え直す朝令暮改ぶり。こんなに悩んだことは、ほんとにはじめてだった。

悩み続けた末の結論は「やっぱりやってみよう！」

決心したからには、何をさておいてもまずい一番にポスター作りをしなければならなかった。

ポスターは選挙運動のはじまりだった。

「ポスター用の写真ってこんなんでいいのかしらねエ」とアルバムから一番お気に入りのスナップを探し出そうとしたところ、

「とんでもない。スタジオでちゃんと撮影するんです」

とピシャリ。知らないとは恐いもの。

それじゃ、洋服は？　ヘアスタイルは？　写真屋さんには？　アクセサリーは？　メイクは？

「さあ、さっそく洋服を買いに行きましょう」

と参議員議員の粕谷照美さんが私をデパートまで連れ出し、デパート中を探し回った。求めるものは真赤なスーツ。

試着室を出た私を見た店員が

「とってもよくお似合いですね。お嬢さまですか。

かわいらしいですね」

と、見えすいたお世辞を言った。

「この人はこう見えてももうじき議員になる人なんです」

と応える粕谷議員。おもしろい不協和音だった。

三十八歳でお嬢さまでもないだろうに、と思いがながらも赤のスーツでは政治家にふさわしくないだろうかと不安になった。でも「原始女性は太陽だった。今も女は太陽です。太陽の赤がシンボルの三井マリ子」と叫ぼうと決めていたので、どうしても赤にしたかった。女の政治家のイメージが暗かったのは地味だからだ。落ちてもともと。私は私のカラーを出して明るくやってみよう。こんなにも出遅れてるんだもの、ハッと息をのむような作戦でいなくなっちゃ……。

たかが一着のスーツを買うのに人知れずまたまた悩んだ。

こうして決まった真赤なスーツを身につけ、翌日、スタジオに向かった。

せいぜい十回ぐらいのシャッターで終わりかと思っ
ていたら、とるわ、とるわ、六十回以上もとりまくっ
た。

「ハイ、笑って。そう、そう、明るくねっ」

顔はひきつり、なかなか自然な笑顔は出てこない。生まれてはじめてのスタジオでの本格撮影。モデルさんの仕事ってキツイんだなあと、妙なところで他の職業に同情したりしているうちにポスターの写真撮影が終わった。

今度は、ポスターのコピー（キャッチフレーズ）を作る作業が待っていた。いわゆるスローガン調の「売上税反対」とか「反核反戦」とか「反中曽根路線」とかの画一的文句はイヤだった。もっと別の方法で新しい世界のはじまりをうち出したかった。柔らかく斬新なイメージをふくらませるような何か。私らしい何か。私の考えていたイメージにピッタリの躍動感あふれるコピーを友人たちが考えてくれた。

「ねえねえ、これいいでしょ。絶対よ」

と見せてくれたのは

「女たちのマリ子

男たちもマリ子」

リズムミカルで、シンプルで、時代感覚にあふれ、一

目見て気に入ってしまった。赤いスーツを着た私の上半身をはさんで、右側に「女たちのマリ子」、それより気持ち下げたところの左側に「男たちもマリ子」という文字が並べられ、ポスターが完成した。

ところが、長年、社会党の選挙を支えてきた人たちは、

「こんなスローガンはじめてだ。これじゃ闘えない」

「なぜ男たちもマリ子なんだ。男女平等を主張する人ならなおのこと、女を先に出して男を補足的に出すなんておかしい。『男たちと女たちのマリ子』にしたらどうか」

有史以来、女は常に男の脇役・付属品だった。女を主人公にしたとたん見えてくる男たちのとまどい、抵抗、失望。選挙を一度もやったことのない私の友人たちは「経験者の意見を大事にした方がいいのだろうか」と、しだいに自信がなくなってきた。それでも結局、女の運動を続けてきた私にふさわしいやり方で進

むことになった。

「女たちのマリ子、男たちもマリ子」は、新鮮な感激を呼び、街中にポスターがあふれる頃は、小学生まで、このコピーを口に出し始めた。自分たちの感性を大事にしてよかった、とつくづく思った。

生まれてはじめてのポスター作りにはじまって、投票日までの期間、なんとおびただしい数の初体験を重ねたことか。

生まれてはじめて、駅前に立ってマイクを握った。
生まれてはじめて、自分の名入りのタスキをつけた。

生まれてはじめて、ポスターをはりまくった。

生まれてはじめて、駅の広場で歌って踊った。

生まれてはじめて、宣伝カーに乗った。

生まれてはじめて、紹介もされない人たちと握手を交した。

生まれてはじめて、白い手袋をして大きく手を振った。

生まれてはじめて、労働組合の大会であいさつをした。

生まれてはじめて、小学校の体育館で演説会をした。

生まれてはじめて、うぐいすボーイズを誕生させた。

生まれてはじめて、社会党の中身をちょっとのぞいた。

数えきれない「生まれてはじめて」を重ねて、私は杉並区の補欠選挙のたったひとりの当選者となった。

高校教員を退職して三十八日後のことだった。

私の出馬動機は、女性の声を政治に反映しなかったからに尽きるのだが、私は自分の当選そのものが、女性の政治参加に寄与したのだ、と思い感無量だった。

東京都には一二人の議員がいるが、女性はたった九人。七%だった。九三%が男性で占められていた。

天の半分は女が支えているにも関わらず、政策決定の場に、女は余りにも少なかった。公約を実行する以前

に、女である私の当選ということ自体が、公約実現第一号となった。

さて、この補欠選挙での「奇蹟の当選」から二年半。議員になってからも初登壇、初質問、初視察、初委員会と、たくさん「生まれてはじめて」をくりかえし、去年の夏には、初の通常選挙をクリアし、今、私は二期目の議員生活をはじめている。

今の都議会の女性率は十三%。つい昨夏までの七%が倍増したのである。もちろん東京都議会初の一割突破だ。都道府県レベルの地方自治体中、これだけ多くの女性が登場したのも、今回がはじめてだ。

女性が参政権を得て四十余年。

選挙権はもうすっかり使い慣れた。ところがもうひとつの参政権である選挙される権利——被選挙権の方はいっこうに使っていない。男たちは次から次へと使いこなしてきたのに。

今まで使いそびれていた被選挙権を、ようやく女たちは行使しはじめた。使い慣れていないから失敗も多

